

禅心裡学講義

道元の「身心・脱落」論 私考 (Ⅱ)

茅原 正

Sinjin-Datsuraku in Dōgen's Zen (Ⅱ)

Tadashi Chihara (*Department of Psychology, Komazawa University, Japan*)

KEY WORDS: *Shinjin-datsuraku* (Sloughing off Body and Mind), *Shikan-taza* (Just sitting zazen), Dōgen's Zen

さて、一息いれて趙州茶。これまで、道元の「身心脱落」の根拠を『宝慶記』の「天童脱落話」に求め、一気に突進してきたが、ここで一担、振り返ってみると、ふと「奇妙な場面に出くわした思ひ」が浮かんでくる。

前の検討から、『正法眼蔵』における「身心脱落」の語・話は、「三昧王三昧」巻、寛元二年甲辰(1244)二月十五日、在越宇吉峰精舎示衆、が最後で、以降、皆無となる。結局、あの「参禅は身心脱落なり、不用焼香・礼拝・念仏・修懺・看経、祇管打坐して始めて得」の語句は、徹頭徹尾、「先師天童云」に尽きるのである。

一方、道元の仏道、仏法を録した『永平広録』は、その上堂が、『正法眼蔵』とは逆に、永平寺開山の寛元二年(1244)頃から激増する。「身心脱落」についても、「先師云」一辺倒ではなく、道元独自の見解とも思える上堂が、しばしば出現する。また、晩年には、「身心脱落」の語はないが、「そのもの」を道得する上堂が数多い。斯言うことから、『正法眼蔵』に残された、「身心脱落」にまつわる、さまざまな問題の解明には、『永平広録』による検討考察が不可欠となる。

そこで老婆心切、「後の先」ならぬ「先回り」、『永平広録』初めから、一気通貫、ながめてみると、思わぬ相^{すがた}が見えてくる。「参禅は身心脱落なり、不用焼香・礼拝・念仏・修懺・看経、祇管打坐して始めて得ん」、斯の道得は、一体全体、何者なのか…。

我々は、いまこの山中で、道に迷って、二進も三進もいかず、暗中摸索の立往生である。とは言うものの、「登山須到頂。登山不登頂、不知宇宙之

寛広。」(『広録』上堂268)と説かれるとおおり、ここは一番、初めに戻って考え直し、再出発せざるを得ない。「身心脱落」探究の旅、正宝さがしの道中双六は、振り出しに戻った。

所謂『宝慶記』は、入宋中の道元が、如浄との授受・やりとりを手記した私記である。その大本は、道元の死後、弟子の懐奘が発見、入手。編集、書写した、実に得体の知れぬ書きものである。何んとなれば、原稿は如何なる体を作すものか、書き付けメモか、まとめノートか、未定の修正原稿か、さらには、如浄-道元、やりとりの「言表」自体の信憑性など、確たることは、全く知れぬが故である。

ともあれ、懐奘真筆の『宝慶記』写本(注1)を基に、今一度、検討、確認してみよう。然る後、そこに於て問題となった事項について考察したい。

宝慶記 (全久院本)

【15】

堂頭和尚曰 参禅者身心脱落也 不用
焼香禮拜念佛修懺看経 祇管打座而已
拜問 身心脱落者何

堂頭和尚示曰 身心脱落者 坐禅也祇管
坐禅時 離五欲 除五蓋也

拜問 若離五欲 除五蓋者 乃同教法之所
談成 即為大小兩乘之行人者乎

堂頭和尚曰 祖師兒孫 不可強嫌大小兩

乘之所説也 學者若背
如來之聖教 何敢佛祖之兒孫者歟

【29】

堂頭和尚慈誨曰 佛祖兒孫 先除五蓋
後除六蓋也
五蓋加无明蓋，為六蓋
也 唯除無明蓋 即除五蓋也 五蓋雖
離 無明蓋未離 未到佛祖修證也
道元便禮拜 謝 又手曰 前來未聞今日
和尚指示 這裏箇 老宿耆年 雲
水兄弟 都不知 又不曾説 今日多幸 持蒙
和尚大慈大悲 忽蒙未嘗問處 宿殖
之幸 但 除五蓋六蓋 有其秘術 他無
和尚微笑曰 你向來作功夫作甚麼 這
箇便是離六蓋之法也 佛 祖 不 待
階級 直指單傳離五蓋六蓋，呵五欲
等也 祇管打座作功夫 身心脱落來 乃
離五蓋五欲等之術也 此外部無別事
渾無一箇事 豈有落二落三者也

【31】

和尚或時示曰 羅漢支佛之坐禪 雖不
著味 闕大悲 故不動佛祖大悲為先 誓
度一切衆生之坐禪也 西天外道 亦坐
禪也 雖然 外道必有三患 謂著味 謂
邪見 謂僞慢 所以 永異佛祖坐禪也
又 聲聞中亦有坐禪 雖然 聲聞慈悲乃
薄 於諸法中 不以利智母通諸法實相 獨善
自身 斷諸佛種 所以 永異佛祖坐禪也 謂
佛祖坐禪 從初發心 願集一切諸佛法 故
於坐禪中 不忘衆生 不捨衆生 乃至 蠅虫
常給慈念 誓願濟度 所有功德 廻向一切
是故 佛祖常在欲界 坐禪辯道 於欲界
中 唯瞻部洲寂為因緣 世 修諸功德 得
心柔軟也 道元拜白
作麼生是得心柔軟
和尚示 辯肯佛々祖々身心脱落 乃柔
軟心也 喚這箇作佛祖心印也 六拜
道元禮拜

以上、懷奘真筆『宝慶記』写本（全久院本）の
忠実な再現を試みたが、その実現には限度がある。

根本的に、この「宝慶記写本」は、「道元の漢文」
を「懷奘が書写」したものである。原文は、縦書、
行書べたで句読点もなく、行末不揃、書字も新旧、
俗字等、混沌し、当世、新字体の横組には似合わ
ない。

以下、斯のような諸点を考慮し、訓読容易な文
体に直し改めて、懷奘書写の『宝慶記』の抜粋を
表示する。

【15】

自誨 1 堂頭和尚示曰、
(注 2)
參禪者身心脱落也、

不用燒香・礼拝・念仏・修懺・看經

祇管打坐而已。

問 1 拜問。身心脱落者何。

誨 1 堂頭和尚示曰、身心脱落者、坐禪也。

祇管坐禪時、離五欲、
除五蓋也。

問 2 拜問。若離五欲、除五蓋者、
乃同教家之所談也。
即為大小兩乘之行人者乎。

誨 2 堂頭和尚示曰、祖師兒孫、
不可強嫌大小兩乘之所説也。
學者若背如來之聖教、
何敢佛祖之兒孫者歟。

【29】

自誨 2 堂頭和尚慈誨曰、

佛祖兒孫、先除五蓋

後除六蓋也。

五蓋加無明蓋，為六蓋也。

唯除無明蓋，即除五蓋也。

五蓋雖離，無明蓋未離，

未到佛祖修證也。

問3 道元便禮拜拜謝，叉手白，

前來未聞今日和尚指示。

這裏箇箇，老宿耆年·雲水兄弟，

都不知，叉不會說。

今日多幸，特蒙和尚大慈大悲，

忽蒙未會聞處，宿殖之幸，

但除五蓋·六蓋，

有其秘術，也無。

誨3 和尚微笑曰，你向來作功夫作甚麼。

這箇便是離六蓋之法也。

佛佛祖祖不待階級

直指單傳離五蓋·六蓋

阿五欲等也。

祇管打坐作功夫，身心脫落來，

乃離五蓋·五欲等之術也。

此外都無別事，渾無一箇事，

豈有落二落三者也。

【31】

自誨3 和尚或時示曰，羅漢支佛之坐禪

雖不著味，闕大悲。

故不同佛祖大悲為先，

誓度一切衆生之坐禪也。

西天外道亦坐禪也。雖然外道，

必有三患，謂著味，謂邪見，謂僞慢。

所以，永異佛祖坐禪也。

又，聲聞中亦有坐禪。

雖然，聲聞慈悲乃薄。

於諸法中，不^レ以利智母通諸法實相

獨善自身，斷諸佛種，

所以，永異佛祖坐禪也。

謂佛祖坐禪，從初發心，

願集一切諸佛法。故於坐禪中，

不忘衆生，不捨衆生，乃至蛄虫

常給慈念，誓願濟度

所有功德廻向一切。

是故佛祖，常在欲界坐禪弃道。

於欲界中，唯瞻部洲最為因緣。

世世修諸功德，得心柔軟也。

問4 道元拜日，作麼生是得心柔軟。

和尚示。弃肯佛佛祖祖身心脫落，

乃柔軟心也。

喚這箇作佛祖心即也。

道元礼拝 六拜。

以上、『宝慶記』における「身心脱落話」にまつわる問答(15, 29, 31)をとり挙げ、それぞれ個々に検討してみたが、ここで、これらの問答を連ねて、通読、通解してみよう。

【15】 如浄和尚が示して言われた。「参禅は身心脱落である。焼香・礼拝・念仏・修懺・看経ではない。祇管打坐こそが身心脱落である」(自誨1)。

道元が拜問した。「身心脱落とは何ですか」(問1)。

如浄示して言われた。「身心脱落とは、坐禅そのものだ。祇管に坐禅するとき、五欲(色欲・声欲・香欲・味欲・触欲)を離れ、五蓋(五つの煩惱、貪欲むさぼり・瞋蓋いかり・睡眠ねむけ・掉悔くやみ・疑蓋うたがい)を除くのだ(誨1)。

道元拜問した。「五欲を離れ、五蓋を除くということであれば、教家教学者の謂うところと同じです。それならば、大小二乗の修行者と同じということになります(問2)。

【29】 堂頭和尚、慈誨して言われた。仏祖の児孫は、先ず五蓋を除くべし、その後さらなる六蓋(無明蓋…根本無知)を除かねばならない。ただ、この無明蓋を除くなら、即ち、そのまま五蓋はなくなる。五欲五蓋を離れるのが仏祖の坐禅であるが、五蓋を離れても、なお無明蓋(六蓋)を離れなければ、仏祖の修証に到らないのだ(自誨2)。

これを聞いた道元は、かしこまって即座に礼拝、低頭して、感謝、叉手して申し上げた。

(…ここは一番、決所、極め所である)「これまで、今日のような和尚のご指示をまったく聞いたことがありません。こちらにおられる長老の、老師・尊宿がたも、参学雲水、修行僧、どなたも全く知らないし、かつて、説かれたこともありません。今日、実に仕合わせなことに、有り難き和尚の大慈悲を被り、かつて未聞の処をお示しいただいたのは、前世の善根(無貪、無瞋、無痴)による仕合わせであります。」(…皮肉めいて言っている)、しかしながら、ただ「五蓋・六蓋を除く」とはい

うものの、一体、その秘術があるのでしょうか。道元、勢いこんで、さらに拜問した(問3)。

これに対して如浄和尚、微笑んで言われた。

あなたがこれまでやってきた坐禅弃道工夫は、一体、何なのだ。それこそが、六蓋(無明)を離れるあり方なのだ。仏祖は修行に階級を設けない。直指、端的に、五蓋・六蓋、五欲等を離れよと強くお示しになった。すなわち、あなたがただひたすらに、坐禅工夫し、身心脱落してきた。それが、そのまま五蓋・五欲等を離れる術なのだ。このほか別に、全く一つのこともない。二とか、三などあるものか。(誨3)

【31】 自誨3〈仏祖の身心脱落は柔軟心である〉

堂頭如浄が或るとき示された。羅漢や支払(声聞・縁覚)の坐禅は、大慈大悲心を欠いている。

また、外道の坐禅には、著味(禅定へのとらわれ)、邪見(道理を欠いた見解)、憍慢(おごり・あなどりの三患つまり、欠陥がある。故に仏祖の坐禅とは永久に異なる。また、声聞の中にも坐禅はあるが、その坐禅は慈悲心が薄い。諸法の中にあつて、利智を以ては、必ずしも諸法実相に通じない。独善は、衆生済度する諸仏の種子を絶やしてしまう。故に、永久に仏祖の坐禅とは一致しない。

仏祖の坐禅というのは、発心の最初から、自未得度先度他の心を発するのである。それ故、坐禅のただ中で、生きとし生けるすべてのものを、忘れず、捨てることがない。あらゆる功德、一切衆生の人間界-欲界にあつて坐禅弃道するのだ。

欲界のなかにおいても、ただ膽部州(注3)だけを最上坐禅の因縁とし、そういう所であればこそ、坐禅弃道するのだ。何故ならば、この人間界のわれわれは、世世を重ねて坐禅して、さまざまな功德を修行して、心を柔軟にできるのだ…。

思いがけない如浄の言葉、何のことやら分からない。

(問4) 道元、拜して尋ねた。

「得心柔軟」とはどういうことでしょうか。

対して如浄が慈誨した。

「仏祖の身心脱落を肯する、乃ち、〈柔軟心〉なり。これこそ、仏祖の心髓〈仏心印〉そのものである」。

道元、礼拝、六拜した。

如浄は〈心塵脱落〉、道元は〈身心脱落〉の坐禅だ。如浄も道元も、それをうすうす感じていたであろう。或るとき、如浄がこう云った。仏祖の坐禅は、五欲・五蓋の根本無知である「無明蓋」を除くことだと。これは、心の塵を脱落する如浄の坐禅に外ならない。如浄はさらに、仏祖の身心脱落は「得心柔軟」であると強示した。道元の、「得心柔軟とは何」という間に、如浄は“仏仏祖祖の身心脱落”を弁肯する。これが“柔軟心”であり、仏祖の心印と作す、と答えた。これは道元〈身心脱落の坐禅〉を弁肯、受けとめ、みとめることだ。

道元は無言で、礼拝、六拝した。これが“最悟”かも知れない…。

如浄と道元、二人は「互^{ちが}い」の分かる、「柔軟心」をもって、嗣法したのである…。

以上、『宝慶記』15, 29, 31条(注4)をつなぎ合わせ、まとめてみたが、これは、もうこの上ない「天童脱落話」の結末としか言いようがない。

よく出来た「話し」であって、われわれ読者にとっても、看過できない問題を投げかけている。

このあとつづいて、頭初に未問の諸問題、この吟味、検討と合わせて考えてみたい。

(未完)

注

- 注1 『中世禅籍叢刊』第二卷、道元集、臨川書店、2010年。懷奘が書写の〈宝慶記〉、影印本。
- 注2 『宝慶記』本文の冒頭に附した「問」は道元の拝問、「誨」は道元拝問に対する如浄の慈誨、「自誨」は道元の問法をまたずして、自発的に如浄から与えられた慈誨を夫々現わすもので、秋重義治氏の表示法に倣^{しやみま}った。
- 注3 瞻部州、須彌山の南方海上にあるといわれる、想像上の地名。古代インド人の世界観でもある。今様に考えると、欲望あふれるこの人間界、釈伽も如浄も道元も、われらみな、この地球に生きているということ。
- 注4 懷奘書写の全久院本『宝慶記』原文には、分段・番号がなく、引用、解説には不向きではあるが、便宜上、全久院本を底本とした。大谷哲夫・道元「宝慶記」(講談社学術文庫)による分段・番号を採り入れた。